イベントによる被災地支援の事例報告
～ FUKUSHIMA×ASKA　Shining Hope Tree ～

柳澤博之（株式会社博報堂　コンベンション・スペース事業部）

＜キーワード＞　被災地支援、イルミネーション、こころの復興

１．イベント計画の背景

JR 福島駅東口駅前広場周辺では、毎年地元商工会議所が主導する実行委員会により街頭イルミネーションイベント「星に願いを・・★」キャンペーンが実施されてきた。しかし、昨年は東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の影響により、実施が危ぶまれる状況であった。

一方で、福岡県に本社を置く化粧品会社アスカコーポレーションは、震災発生直後より物資の提供を行うなど被災地支援に力を入れており、その活動の一環として、年末にクリスマスイルミネーションを提供したいという意向を持っていた。美しいイルミネーションを見た被災地の方々が、その一瞬だけでもつらい現状を忘れて笑顔になれる。そんな機会を提供することで、被災者の「こころの復興」を支えたいという意図である。そして、東北地方でイルミネーション設置の適地を探す中、福島駅前のイルミネーションイベントの窮状を知り、特別協賛として参加することになった。

アスカコーポレーションは、前年の 2010 年に福岡市内で大規模なイルミネーションイベントに特別協賛して成功させた実績があり、今回はその時に購入した電飾資材の一部を活用して、福島県内最大級となる高さ約 13mのクリスマスツリー型イルミネーションを制作するという計画である。

２．実施に向けての課題と解決の方向

（１）　例年通り補助金や寄付が集まるか（経済的課題）

「星に願いを・・★」キャンペーンは、市の補助金と一般市民や企業の寄付によって成立しているが、震災の影響により市の予算状況は厳しく、寄付も例年通り集まるか不透明であった。しかし、アスカコーポレーションが協賛参加を申し入れたことで市の予算措置を後押しするかたち、実施に向けて大きく動き出すことになる。

（２）　電力需給の見通しと市民の反応（社会的課題）

暖房による電力需要が一気に高まる年末に、果たして必要な電力を確保することが出来るのか。また、節電機運が高まる状況の中で、イルミネーションイベントに対する社会的な反応も未知数であった。これについては、自粛よりも地域に活気を取り戻すことを第一義と捉えるとともに、クリスマスツリー型イルミネーションの点灯に必要な電源は、専用の発電機により発電して、東北電力の電気を使用しないこととした。

（３）　会場広場の接地面が微妙に傾斜している（技術的課題）

ツリーを設置する福島駅東口駅前広場の床面は、排水のための水勾配がとられている。見た目には僅かな傾斜だが、高さ 13m のツリー型構造物を設置すると、全体が微妙に傾いて見えてしまう。床面を傷めることが出来ない条件の中、まっすぐに立ち、なおかつ風雨や雪にも耐えうるように、仮組したツリー構造物をクレーンで吊り水平を出したうえで足元を固定するという工法を採用した。

３．イベントの概要

名　　称：FUKUSHIMA×ASKA　Shining Hope Tree

会　　場：JR 福島駅　東口駅前広場

設置期間：2011 年 12 月 20 日（火）～12 月 25 日（日）　6 日間

点灯時間：17 時～23 時（20 日のみ点灯式実施のため 18 時点灯）

主　　催：福島駅前周辺街路樹電飾事業実行委員会

後　　援：福島中央テレビ、テレビユー福島、福島テレビ、福島放送、福島民報社、
　　福島民友新聞社（順不同）

特別協賛：アスカコーポレーション

※「星に願いを・・★」キャンペーンは、12 月 1 日から 2 月 14 日までの約 2 ヵ月半実施。

４．イベント実施の状況

クリスマスツリー型イルミネーション（左）
プレゼントの配布風景（上）

クリスマスツリー型のイルミネーションを展示した 6 日間の来場者数は、延べ約 2 万 1 千人（主催者発表）にのぼり、大きな混乱もなく無事終了した。特に、20 日の点灯式の模様はメディアに大きく取り上げられ、師走を迎えた被災地に明るい話題を提供することができた。会期中はアスカコーポレーションより来場者に対して、基礎化粧品（4,350 セット）やお菓子（1,000 個）のクリスマスプレゼントも配布されるなど、会場周辺は多くの笑顔につつまれた。

５．イベントを終了して

イルミネーション装飾は、老若男女すべての人々に受け入れられる演出であり、その規模は大きいほど人々を魅了する。今回実現した高さ約 13m というボリュームの装飾は、いまだ震災復興の道筋が見えない被災地の方々に対して、ひと時の安らぎと感動を提供することが出来たのではないかと考える。それは、実施後に来場者から寄せられた数多くの感謝の言葉からも感じ取ることができる。ある来場者からは、「イルミネーションそのものの美しさもさることながら、遠くから被災地のことを思い、実現のために動いてくれたその気持ちが一番うれしい」との発言があった。イベントの実現を通して支援の気持ちをかたちにすることは、被災者の「こころの復興」に寄与する一つの有効な方法であることは間違いない。今回の企画を通して、被災地の支援に向けて行動することの大切さを実感するとともに、イベントのもつ可能性を改めて認識することができた。